

ビワキジラミの発生状況と薬剤防除技術の開発について

中西友章¹・今井健司¹・兼田武典²・井上広光³（1 徳島県農総技支セ資源環境研究課，2 徳島県農総技支セ経営推進課，3 農研機構果樹研究所）

昨年5月，徳島市，小松島市，阿南市，勝浦町と佐那河内村でビワに寄生するビワキジラミが初めて確認され，本種が寄生した樹では果実や枝葉に幼虫が排泄した甘露が付着し，これにすす病が発生した。多発生樹ではすす病により，果実が全て出荷できない事例も見られた。本年5～6月の調査では，当該発生地域に加え周辺の神山町，鳴門市，上板町，石井町などでも発生が確認されたことから，被害の拡大が懸念される。しかし，本種は未記載種であることから生態の詳細は，明らかになっていない。

そこで，生態の解明と防除技術の開発に資するため，ビワ樹上における本種の発生状況を調査するとともに，他のビワ害虫に登録のある薬剤を供試し，薬剤効果試験を行った。

昨年5月から1年間観察した結果，ビワ樹上では，9月下旬頃から花芽で卵が見られるようになり，その後，秋から春にかけては，一部の期間を除き全てのステージが見られた。幼虫は花蕾，果梗部などに寄生し，幼虫の排泄する甘露およびすす病が目立つようになるのは5月頃であった。成虫の発生盛期は5～6月と思われ，この頃は葉裏に多く見られるが，その後，減少した。

昨年の薬剤効果試験の結果では，成虫(夏)に対してはジノテフラン水溶剤 2000 倍の効果が高く，トラロメトリン水和剤 2000 倍も一定の効果が認められ，幼虫(秋)に対してはアセタミプリド水溶剤 2000 倍およびジノテフラン水溶剤 2000 倍の効果が認められた。

さらに，これらの薬剤について本年果実袋掛け前に散布処理を行った。

本講演では，これらの調査研究の結果ならびに今後の課題等について発表する。



写真1 成虫（葉裏，5月）



写真2 幼虫（花蕾の間，11月）